

方広寺大仏殿の築地塀

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 見つかった築地塀跡(東から)

はじめに 天正16年(1588)、豊臣秀吉は、東山に大仏殿(方広寺)の造営を始めました。永禄10年(1567)に焼亡した東大寺の大仏に代わるものを造るためです。

大仏殿を囲う築地塀は、文禄5年(1596)の地震で倒壊します。その後、豊臣秀頼によって新たに回廊が再建されました。江戸時代に火災によって大仏殿は失われましたが、2020・2021年に実施した発掘調査で、創建期の大仏殿の築地塀跡が見つかりました。

築地塀跡 築地塀跡(写真1)は大仏殿創建期の整地層上面で、基礎くろうんも部分となる黒雲母花崗岩製の地覆

石と礎石列が確認されました。北側の地覆石(図1)は、長さ0.4~1.1m、厚さ約0.4mの石7基が見つかりました。上面に柄穴ほぞあなが施される石材が2基あり、柄穴の間隔は3.3mです。南側の礎石列は長さ0.6~0.9m、厚さ0.4mの礎石2基が見つかりました。それぞれ上面に柄穴が施され、地覆石と同様に間隔は3.3mです。

これらの柄穴は築地塀の寄柱よせしらを差し込むために加工されたと考えられます。地覆石と礎石列の柄穴同士の幅は2.2mです。これが築地塀の幅となります。これは、東寺の東築地塀や三十三間堂太閤塀に匹敵す

る規模です。一般的な寺院の築地塀は、この半分程度の大きさしかありません。また、一つの塀の北と南で、地覆石と礎石列という異なる施工方法が用いられており、ほかではあまり見られない特徴です。

地覆石と礎石列は、幅3m以上の溝を掘り、粘土層と礫層を交互に積み重ねた地業じぎょうを行ない、その上に東西方向に平行して据え付けられています。地覆石と礎石列の下は、石材の沈下を防ぐために多量の礫を入れていました。地覆石と礎石列は、石上面の標高がおおむね41.66mに揃えて据え付けられていました。

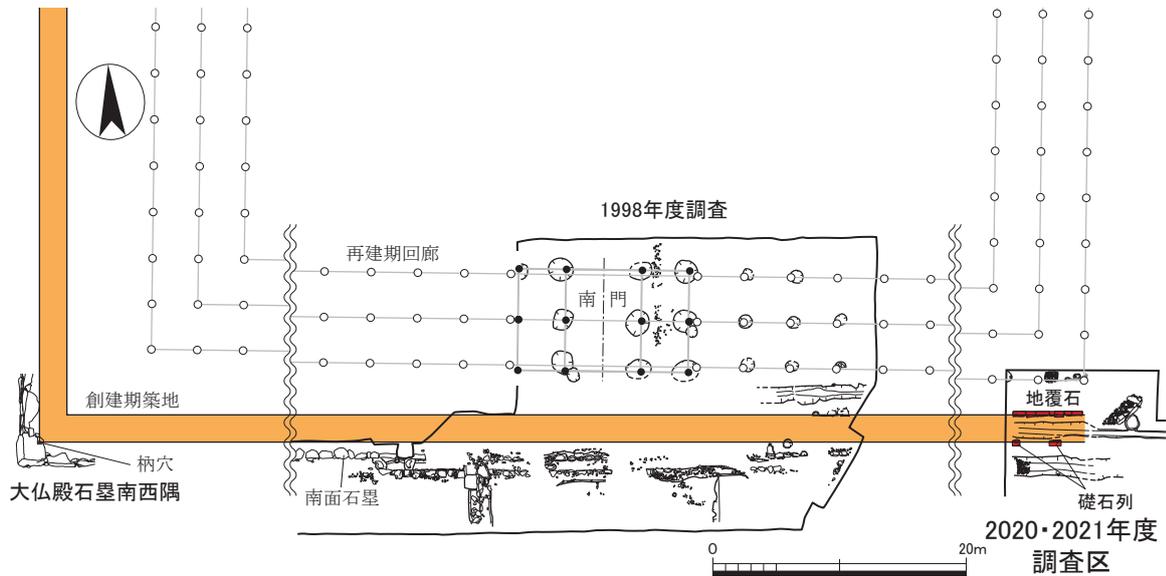


図1 方広寺築地推定ライン復元図 (S = 1 : 600)

石塁との関係 京都国立博物館表門（西門）の北側には、大和大路に面して高さ約3m、南北の長さ約250mにも及ぶ石塁がみられます。この石塁南西隅の巨石上面に柄穴が確認されており（写真2）、2020・2021年度調査で確認した築地堀跡の柄穴との位置関係から、石塁の柄穴と見つかった築地堀跡は、一連の築地堀の基礎部分と考えられます（図1）。石塁南西隅から今回見つかった築地堀跡までの直線距離は約198mあり、角度は北に対し東へ3度24分傾く方位です。石塁上面の標高は41.12mで、築地堀跡の石上面の標高とは約0.5mの差がありますが、約198mの距離では、傾きは0.25%の勾配となり、ほぼ水平とみなせます。大仏殿南面の区画施設は、石塁が南西隅から東に伸び、途中で収束します（写真3）。これは東が高く、西に低い地形であることから、大仏殿造営地を平坦にするために西側には巨大な石を積んで土留めとし、土を盛ることで、高低差を解消したと考えられます。



写真2 石塁南西隅の巨石上面（東から）



写真3 1998年度調査時に見つかった南面石塁（南西から）

おわりに 過去の調査で、再建期の回廊や南門の跡は見つかりましたが、創建期の築地堀跡が発掘調査で確認されたことは今回が初めてです。また、今回の調査によって、石塁南西隅の上面に施された柄穴が、

創建期大仏殿の築地堀に伴うものであることを改めて証明することとなりました。

その歴史的重要性から、築地堀跡は現地保存されています。

（渡邊都季哉）